

第2章 京都大学病院構内A J 10区の発掘調査 I

千葉 豊 長尾 玲

1 調査の概要

本調査区は、病院西構内（薬学構内）の北西部、鴨川の東方約100mに位置しており、聖護院川原町遺跡として登録されている地点にあたる（図版1－521地点、図2）。この地に、京都大学（南部）総合研究棟（環境・生存・共生イノベーション拠点棟）の新営が計画された。この地周辺は、江戸時代には吉田村の南西端にあたっており、発掘調査が実施されたことはなく、今回の新営予定地の西に隣接する稲森財団記念館新営のさいの工事立合では、地表下2m以上にわたって鴨川の氾濫原を示す堆積物が確認されていた（342地点）。一方、より東で実施された立合調査では、近世の遺構や遺物包含層を確認している地点があり（415地点など）、本地点の南東側、近世聖護院村の村域内でも、近世の耕地開発に関連する遺物包含層や遺構が複数確認されている（349・379・398・515地点など）。以上の調査成果を勘案して、まずは新営予定地における遺物包含層・遺構の有無や深さを確認する必要があると判断し、2024年5月30・31日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、試掘地点4箇所とも近世の遺物包含層が良好に残存していることが明

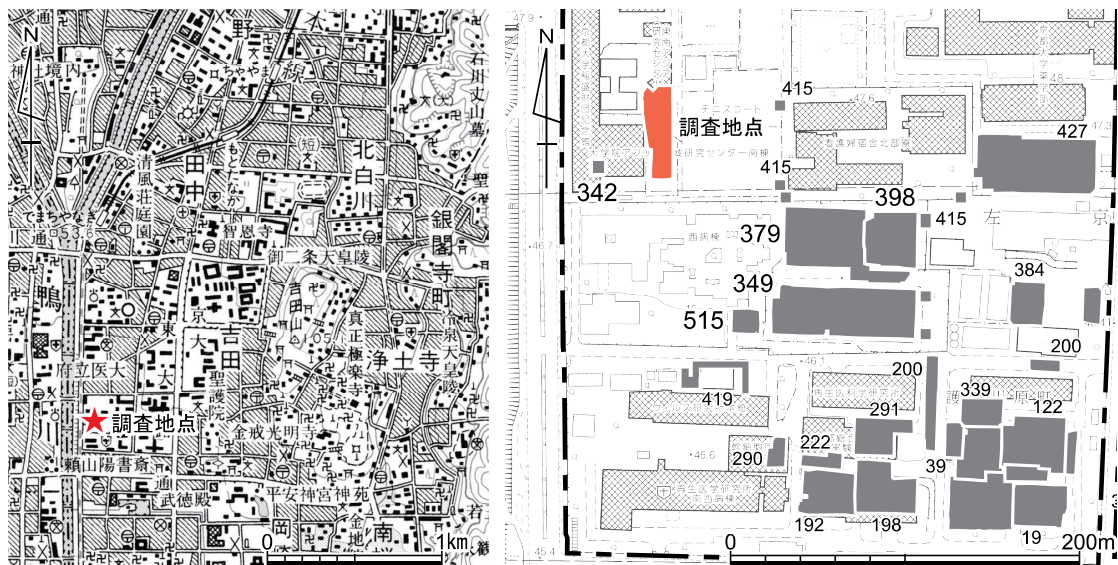


図2 調査地点の位置 縮尺：左1/5万，右1/5000

らかになった。病院西構内の西端，鴨川至近のこの一帯が近世以降，どのように開発されていったのか土地利用の歴史を明らかにすることを課題として，本調査を実施することにした。調査期間は2024年11月18日～2025年2月4日，調査面積は690m²である。

調査の結果，明治時代中期から1960年代まで存続した京都織物株式会社の煉瓦造の工場基礎や近代の川跡，江戸時代の井戸や野壺，柱穴など耕作関連遺構を検出し，江戸時代から近代に至る土器・陶磁器・煉瓦・瓦・ガラス製品など整理箱20箱の遺物を得た。江戸時代から近代にいたる，この地の土地利用を解明する重要な情報を得ることができた。

2 試掘調査の結果

(1) 試掘調査の概要

研究棟新営予定地の北西付近，北東付近，東側中央付近，南東付近の4箇所²に2×2mの試掘坑4箇所（TP1～TP4）を設定した（図6）。調査面積は合計16m²。出土遺物は，整理箱1箱であった。

4箇所の試掘坑いずれもほぼ同様の堆積であった。現地表下180～250cmで，灰褐色土を確認した。厚さは30cm前後で近世の遺物を包含する耕作土層である。この下部は，砂礫層で高野川系流路の氾濫原であった。現地表から灰褐色土の上部までを覆う堆積のうち，上部の60～70cmは大学による整地土と見られる。下部は，煉瓦や瓦，近代の陶磁器を含む地層であった。ここには，明治時代中期から1960年代まで京都織物株式会社が存在し，その後，京都大学がその敷地を購入して現在にいたっている。多量の煉瓦などを含む厚い堆積は，京都織物株式会社の工場に関連する堆積と判断した。

(2) 出土遺物（図3・4）

灰褐色土出土遺物（I1～I15） I1～I4は土師器皿。I1・I2は径の大きさからすると雛皿の可能性はある。I1は内面に銀雲母が附着している。I3・I4は小片で径は不明。前者は外面に一段のナデが見える。後者は摩滅して外面の調整が見えないが口縁の形態から，中世後半の皿の可能性はある。I5～I9は陶器。I5は椀底部で外面に白色の釉がかかる。I6は灯明皿で内面に釉が施され，目跡が残っている。I7は内面と外面の途中より上に釉がかけられる。土鍋の底部か。I8は胡麻炒り具。外面に釉薬がかかり内面に煤が附着している。I9は外面に彫りと釉が施され，内面には布目が残る。I10～I12は磁器。I10・I11は椀で，残存部には染付などの模様が見えない。I12は染付の小片で径は不明であるが，焼継ぎのあとが見られる。I13は軟質施釉の土製品で内面

試掘調査の結果

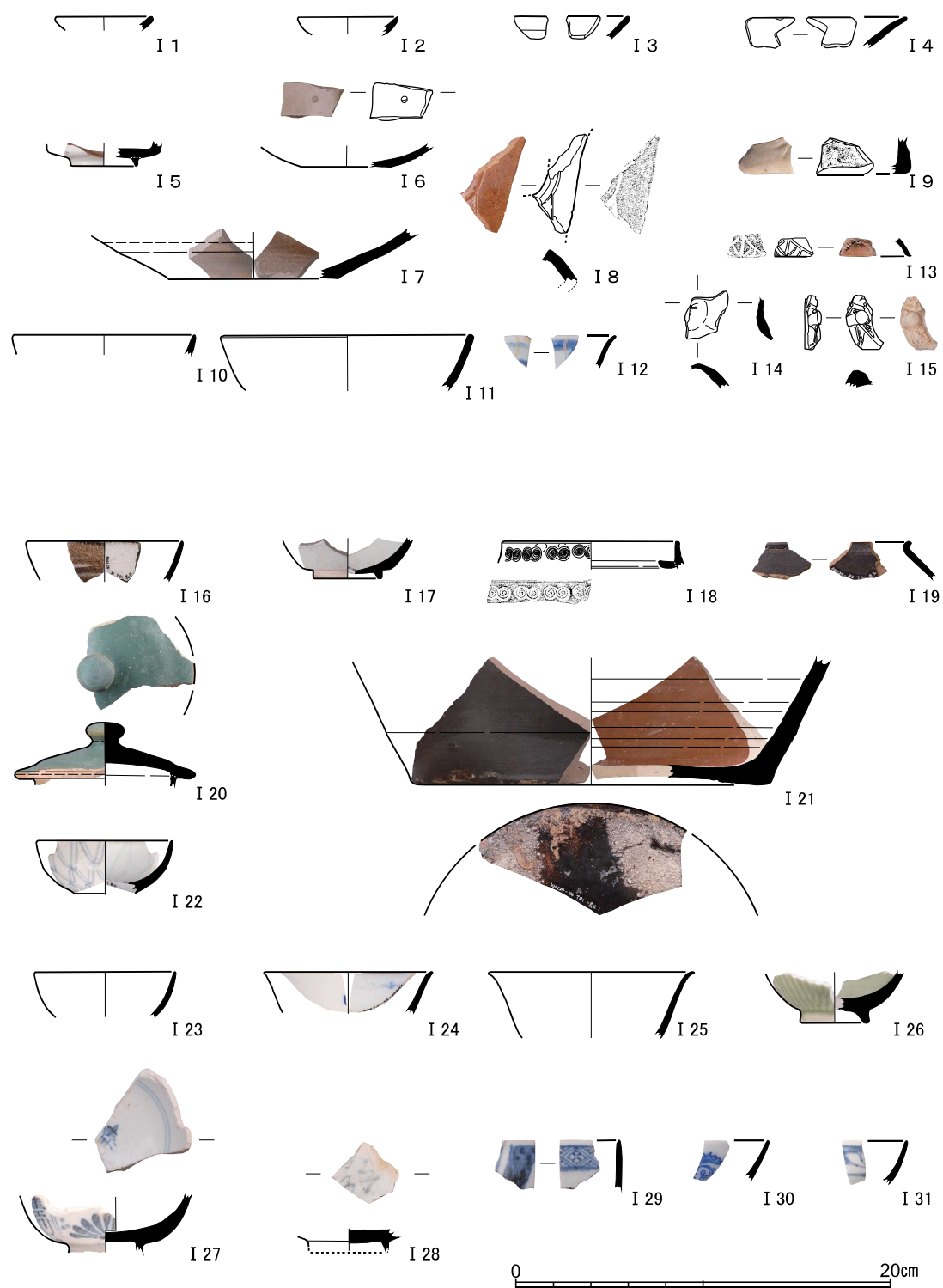


図3 灰褐色土出土遺物（I 1～I 4土師器，I 5～I 9陶器，I 10～I 12磁器，I 13～I 15土製品），
表土出土遺物（I 16～I 21陶器，I 22～I 31磁器） 縮尺1/4

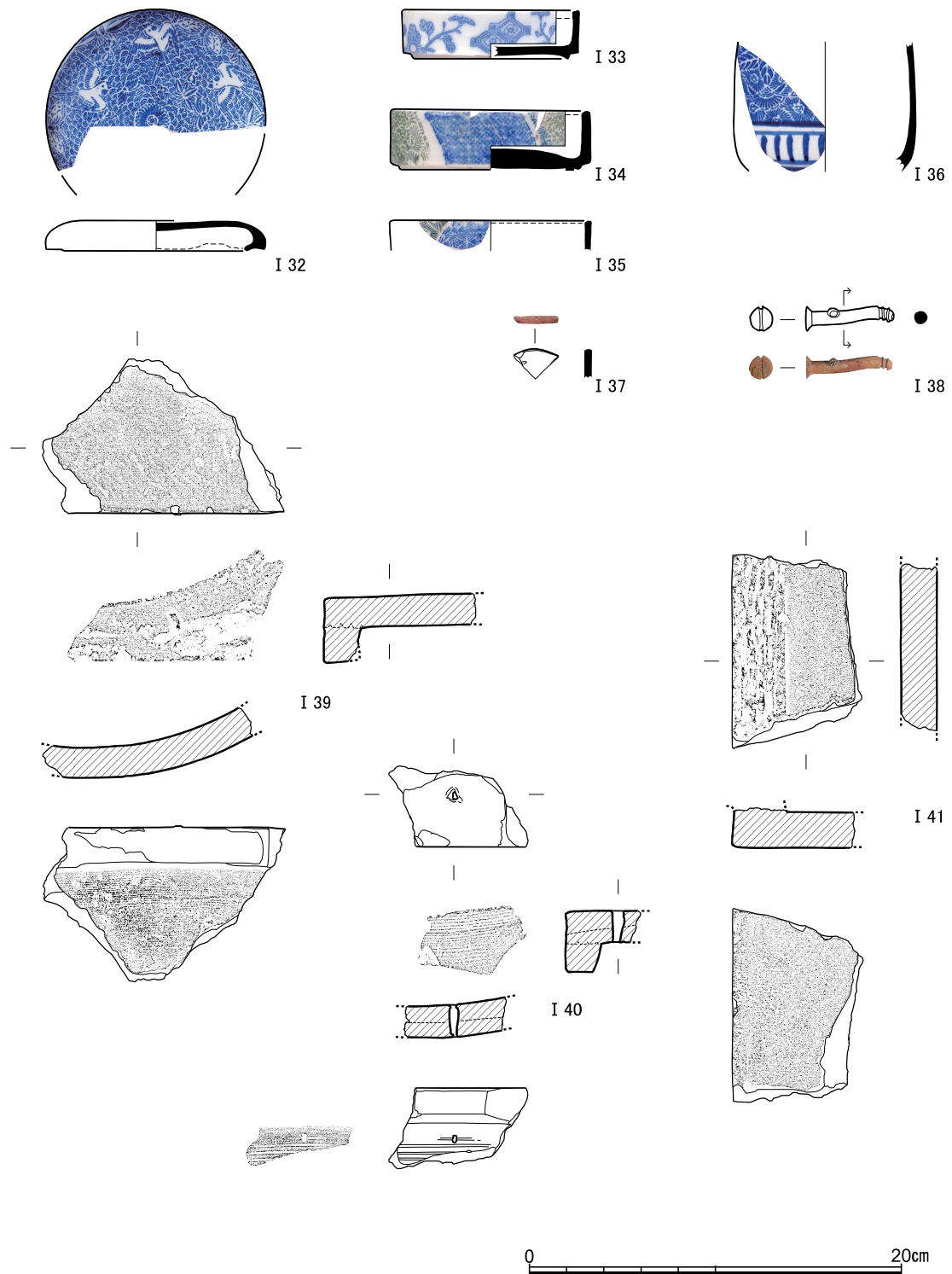


図4 表土出土遺物 (I 32 ~ I 36磁器, I 37土製品, I 38金属製品, I 39 ~ I 41瓦) 縮尺1/4

に施釉，外面に線刻模様が施されている。I 14・I 15は伏見人形。前者は顔の一部。後者は表面に朱が部分的に残り，打ち出の小槌を手に行っていることから大黒天の右手付近か。これらのうちI 3・I 10・I 13はT P 1出土，I 1・I 4・I 7・I 9・I 11・I 12・I 14・I 15はT P 2出土，I 2・I 6・I 8はT P 3出土，I 5はT P 4出土である。

表土出土遺物（I 16～I 41） I 16～I 21は陶器。I 16は碗の口縁部，I 17は底部で，いずれも内外面に施釉する。前者の内面は白色の釉，外面は茶色の釉の上に横方向の白泥が塗られ，口縁には黒色に近い口錆が施される。I 18は口縁部で外面上部に二連の渦巻き状のスタンプが押される。内面に突出した粘土接合部の下方には釉がかけられている。急須などの口縁部だろうか。I 19は口縁部小片で内外面に鉄釉が施される。I 20は蓋で外面に銅緑釉をかけている。I 21は鉢底部。内外面および底部に鉄釉が施されるほか底部には離れ砂が附着している。外面の釉の方が内面よりも茶色が濃い。I 22～I 31は磁器。I 22・I 24は染付碗，後者は口縁部に口錆が施される。I 23・I 25は碗口縁で残存部分に染付は見当たらない。I 26は青磁の碗底部で外面には鎬文が施されその上に釉がかけられているほか，内面にも釉がかけられている。I 27・I 28は染付底部である。I 29～I 31はいずれも染付の口縁小片であり径不明。内外面とも染付のあるI 29には焼継ぎの跡が残る。I 30は近代の型紙刷りのものか。

I 32～I 36はいずれも近代の型紙刷りの磁器染付。I 32は蓋，I 33～I 35は蓋物の身，I 36は胴部でいずれも外面に染付が施されているほか内面にも釉がかけられている。I 37は土製品で側面にわずかに釉がのこり，軟質施釉とおもわれる。I 38はマイナスの金属製のねじ，工場機械の何らかの部材として用いられたものであろうか。I 39は一文字軒瓦の瓦当部。瓦当の成形はきわめて粗く，工場の屋根瓦のように外部からの見栄えを意識していなかった瓦である可能性もある。I 40も軒瓦と思われるが，瓦当表面は刷毛のような調整が施されているほか瓦当近くに穿孔が施されている。また外面の色調は全体的に褐色味を帯びており，断面では瓦当接合痕以外の粘土の継ぎ目が見える。I 41は塀棧瓦の一部で棧部が接合部で剥離したものか。I 16～I 41はすべてT P 1出土であり，本調査で検出できたS R 1にあたる部分も含んでいる。

3 層位と遺構

層 位 調査地の現標高は，48.3mでほぼ平坦である。調査区南東部の層序を模式的に示して説明する（図5）。機械掘削の対象とした表土（第1層）は，2.2mの厚さをも

つが、大きく3つに区分される。もっとも上部の1 a 層は大学の整地土、その下部の1 b 層は瓦や煉瓦を含んでおり、京都織物会社設立時の造成土とみられる。最下部の1 c 層は厚さ0.3m前後の堆積で、砂礫からなる下部と細砂・シルトからなる上部に分離できる。幕末におこった鴨川の氾濫による堆積物と判断した。第2層は灰褐色土で、0.5mの厚さをもつ。江戸時代の耕作土で、明の強い上部（2 a 層）と黒みの強い下部（2 b 層）に分離できる。第3層は高野川系流路による砂礫層である。この地一帯の基盤層であり、この下部には人の活動痕跡はないと判断し、この面で発掘を終えた。

遺構（図版3，図6） 表土を除去中に、煉瓦造の建物基礎と煉瓦造柱基礎を検出した。建物基礎、柱基礎ともに最下部に栗石を敷き、コンクリート基礎を置いて、その上に煉瓦積みの基礎を構築している。京都織物会社の工場に関わる遺構である。これらに関しては、次年度の年報で測量図を掲げて詳述する予定である。

表土を除去した灰褐色土上面でみつかった川跡SR1は調査区西端をやや蛇行しながら南へと流れ、調査区南半では区外へと続いている。検出面からの深さ0.6m、川幅は1.6～1.9m程度である。西側の川縁が確認できたのは調査区北西端のみであったが、花崗岩の切石の並びが2列検出された。東側の切石は川（東側）へ向けて面をとっており、西側の切石は西側へ向けて面を作っていた。面間の距離は1.7～1.8mで、その間に拳大から小児頭大の礫を裏込めし堤防状の護岸を構築していた。東側の川縁には、このような護岸は認められなかった。仮製2万分1などの近代の地図には、初期の京都織物会社の建物と建物のあいだを流れる川筋が描かれており、SR1はこれに比定することができる。埋土からは、近代陶磁器やガラス製品、瓦などが多数出土した。19世紀前半までの吉田村を描いた『吉田村古図』（京都大学総合博物館蔵）にはSR1に対比できる川跡は描かれていない。SR1は明治時代初期に作られ、京都織物会社の工場拡張にともなって、川跡の上に建物

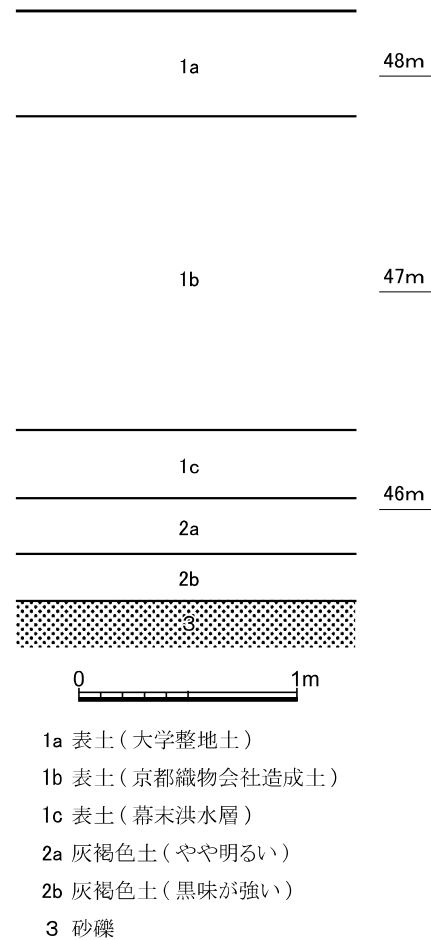


図5 基本層位 縮尺1/40

試掘調査の結果

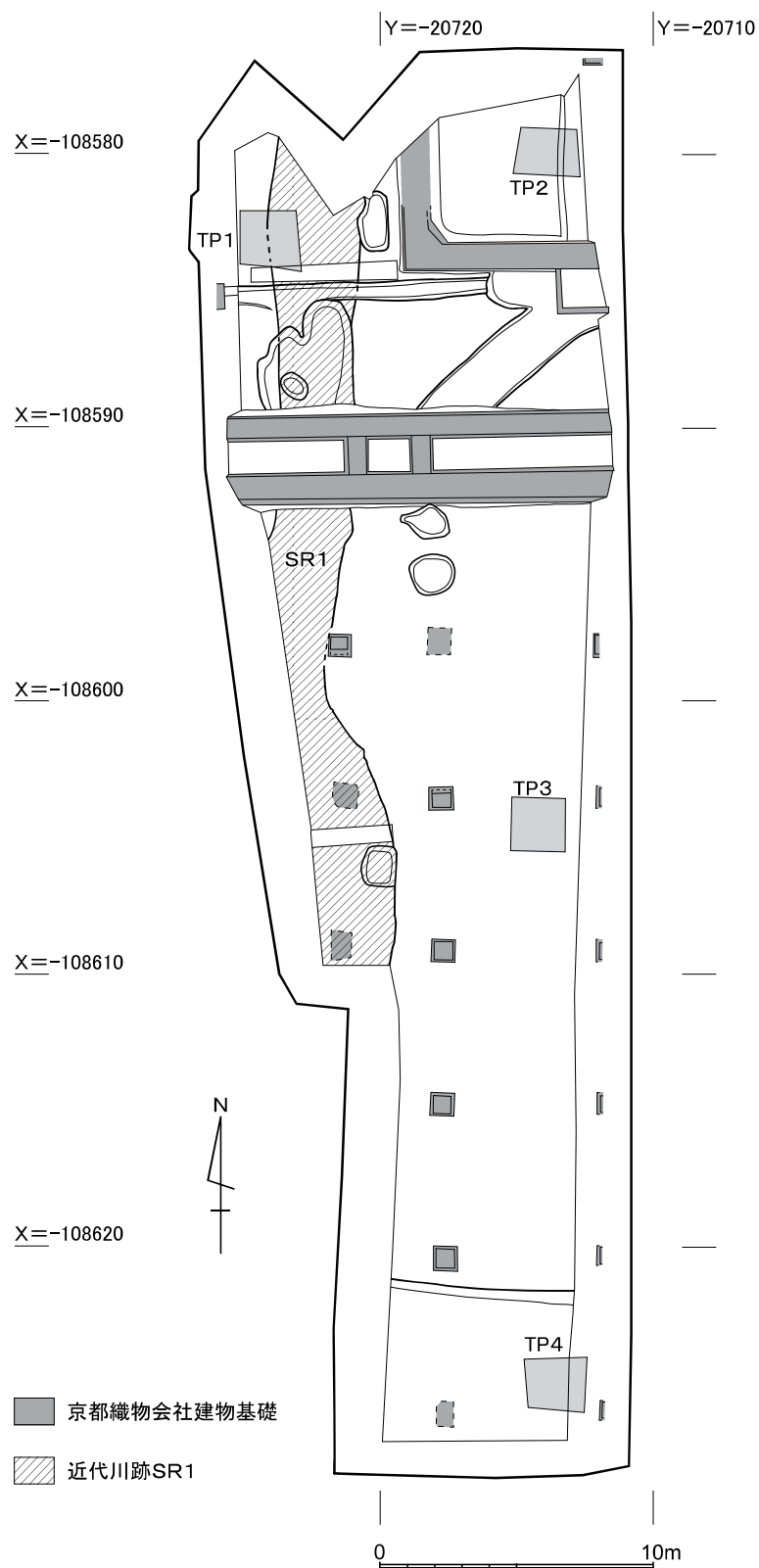


図6 表土掘削後、検出の遺構

基礎が構築された大正年間には、廃絶していたと想定できる。

灰褐色土を除去後の砂礫上面では、井戸・野壺・柱穴などが見つかった。井戸は井筒を石組みで構築している。石組みが崩落していると判断できるものも含めて、5基以上見つかった。井戸の傍らでは、径が1.4～1.9mほどで検出面から0.2～0.4m程度の深さをもつ円形の落ち込みも確認した。桶の痕跡等はないが、木製桶を設置した野壺と判断する。井戸と野壺のセットは、病院構内A E 12区・A E 13区〔千葉・森下1993〕など大学構内の江戸時代の遺跡で多数見つかっている。井戸の水で、肥を希釈して肥料として利用したのであろう。なお、この界限では、野壺は木製の桶が古く、幕末明治時代になると漆喰製に変化することがわかっている。本調査区では、漆喰製の野壺はみられないので、これらは幕末まで下ることはないと考えているが、詳細な年代は次年度の年報で検討したい。

4 出土遺物

S R 1 出土遺物を掲げて説明を加える（図7）。I 42～I 45は同型品の陶器小椀。内面を白化粧した後、見込みに鉄絵で織物制作に用いる杼（シャフト）をクロスさせた意匠を描いている。同様の意匠は病院構内A I 15区から出土した磁器碗の見込みにも描かれてい



図7 S R 1 出土遺物（I 42～I 46陶器，I 47～I 51磁器） 縮尺1/4

小 結

る〔富井・内記2017, 図13－I 99～I 102〕。これは京都織物会社の商標として用いられた図案〔千代間1969 p.33〕である。I 46も陶器小椀。内外面に白泥を刷毛塗りし、胴部に「京都織口（物）會社」と入れている。これも病院構内A I 15区より「京都織物會社」と記された小椀が出土しており〔富井・内記2017, 図13－I 104〕, 同類である。I 42～I 46は, 京都織物会社で使用するために特注された製品であろう。I 47～I 49は磁器染付の小椀。I 50は磁器染付の鉢。I 51は磁器染付の段重。

SR 1からは, これら以外にも京都織物会社に関連するとみられる多くの近代遺物が出土している。また, 灰褐色土や井戸などの近世遺構からは江戸時代の遺物が多数出土している。調査終了後間もないため, これらの多くは整理途上である。近世の耕作土である灰褐色土がいつ頃形成されたものなのかは, 鴨川東岸に隣り合う地点の開発開始年代を明らかにする上で, 重要な課題であろう。出土遺物の整理を進め, 次年度の年報で詳細を報告することとしたい。

5 小 結

史料や江戸時代古図, 近代地図などから, 江戸時代以降の本地点は, 近世吉田村の耕作地から幕末に設置された洋式練兵場, そのあとの京都牧畜場, そして明治23年, 京都織物株式会社による本社工場の設置〔千代間1969〕, 京都織物株式会社の清算にともなう京都大学による敷地の買収（1960年代）へと土地利用が変遷したことがわかっている。発掘調査では, 近世の耕作に関わる井戸や野壺, 幕末ごろの氾濫堆積, 近代の川跡, 京都織物株式会社の工場基礎などを検出し, 文献上で判明している土地利用の変遷をおおむね跡づける成果を得ることができた。

本章は第2節(2)を長尾が執筆し, それ以外を千葉が執筆して, 両名で全体の調整をおこなった。発掘調査は千葉豊と長尾玲が担当し, 測量や資料の整理などで, 磯谷敦子, 河野葵, 小出来晃平, 小山賢太郎の助力を得た。なお本稿は発掘終了後, 短期間でまとめたため, 概要にとどまっている。詳報は次年度の年報でおこないたい。